

誌雜・究研劇演・刊月

道 頼 振

號七十四百第



一部

25 セン

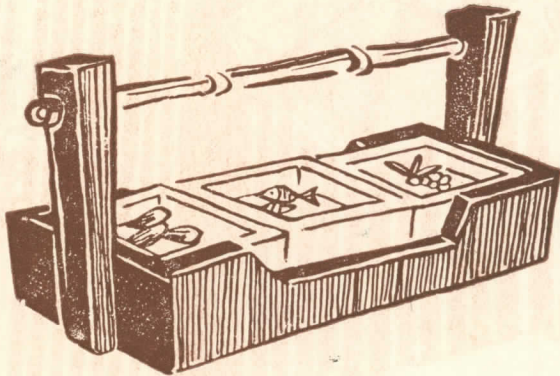
號 月 二

昭和二年十月廿五日 第三種郵便物認可
昭和十四年二月十日印刷(毎月一回)
昭和十四年二月十五日發行(十五日發行)
「道 頼 振」 第四百四十七號 第十四年

味の素

登録商標

肴は氣どり
殊に前菜は
味の素で
味をつけた物
など、又
一段と好まし



味の素本舗 株式會社 鈴木商店

時局下のお買物は

「そびん」へ



そびん



目次

道頓堀 第四百十七號

劇と宗教

宗教劇・高僧傳……………高谷伸(2)

役者と信仰……………伊臣眞(4)

□小太夫の月形半平太……………(8)

成駒屋の思出

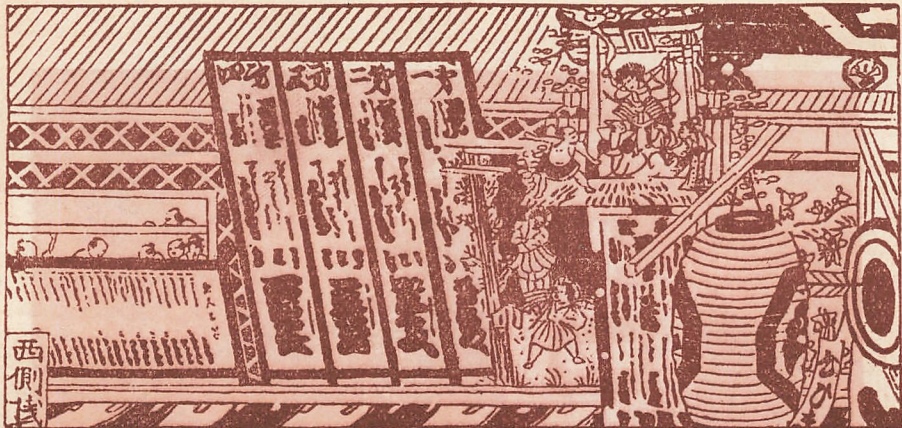
鴈治郎の倒れた頃……………高安吸江(9)

鴈治郎の偉さ……………富田泰彦(12)

□雁のかげ……………(11)

大坂 歌舞伎座 如月狂言

延若の權太……………篠山吟葉(14)



役者 氣質

坂本猿冠者 (18)

——延若の權太に就いて——

- 中座の五郎劇 (16)
- 角座の「沙羅乙女」 (17)

能と歌舞伎

勸進帳と千本櫻

森 ほのほ (20)

- 歌舞伎 古川柳 (33)

「義經千本櫻」の解説

三木八十八 (23)

- 紙上漫才 成駒屋!! 龜村正治 (30)

通し狂言の演出

Z T 生 (27)

- 編輯後記 (34)

特輯 グラフ

大阪歌舞伎座二月狂言各種

表紙 成駒屋の富樫

扉 藝術 (小山内薫)

天下之銘酒

白雲

長澤伊丹灘 小西酒造株式會社



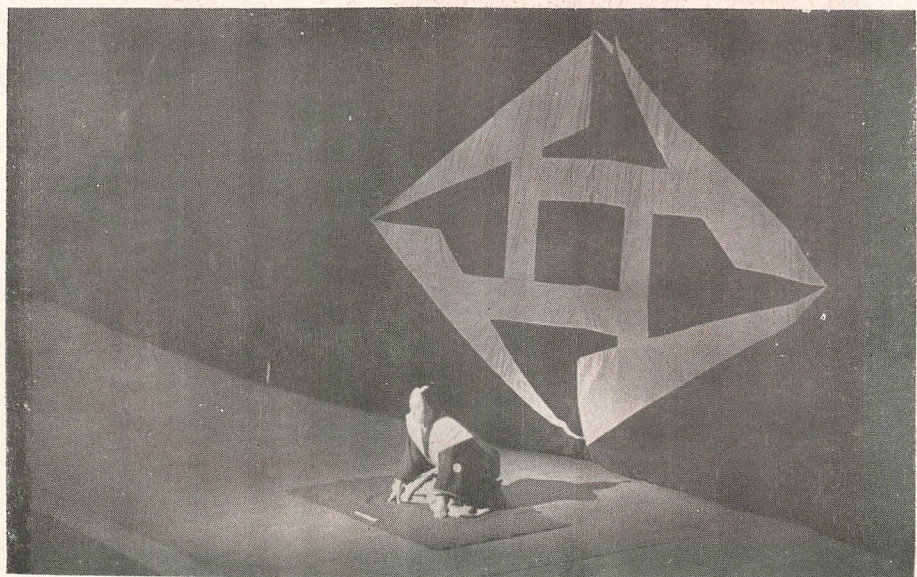
時局下日本精神に沿つた名作陣の

中村 鴈治郎 追慕 興行

二月の歌舞伎座



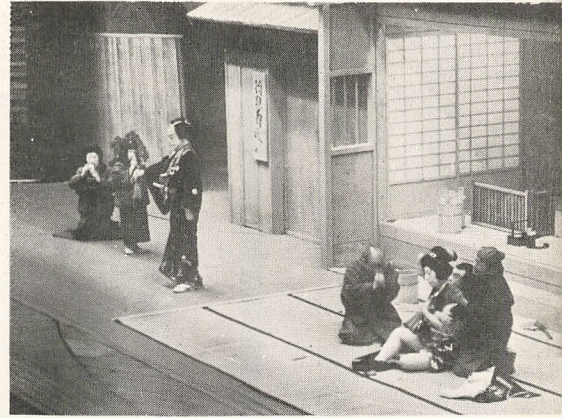
けかもおの日しりあ
丈郎治鴈村中



櫻本千經義



實川延若丈の
いがみの權太



の丈藏市川市
門衛左彌

の丈車魁村中
助彌男下

の丈助之鶴東坂
里お娘

(面臺舞の屋舂瓶釣示下)

前 御 靜 の丈雀扇村中

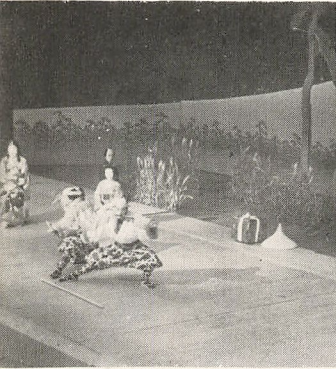


(面臺舞の館眼法連河)



狐 郎 九 源 の丈助之猿川市

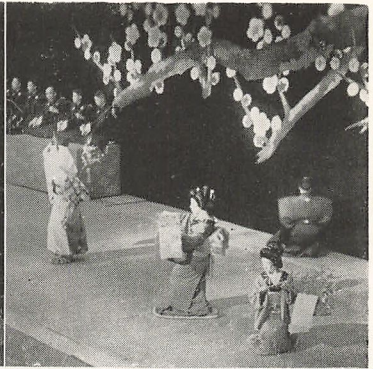
雪の嶽富



月の澤立鴨



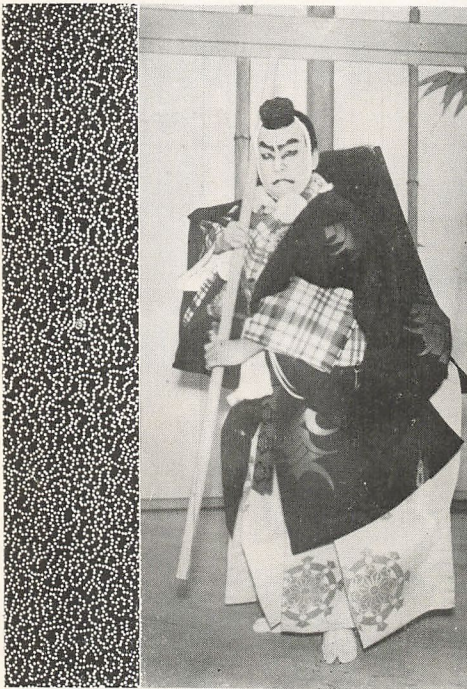
花の磯大



我 會 倂 月 偲



中村長三郎丈の
源 義 經



帳 進 勸

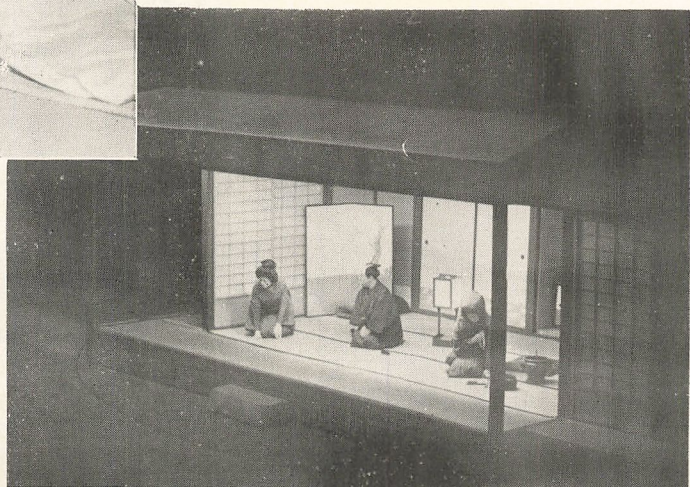
慶 辨 坊 藏 武 の 丈 助 之 猿 川 市

門 衛 左 樞 富 の 丈 郎 十 宗 村 澤

歌
し
ぐ
れ

中村芳子丈の 娘お町
中村魁車丈の おれん

面臺舞の敷座離の屋國の伊紀



面臺舞の撰喜

京都市堺町通三丁目

電本局(2)

長

二二二
一一一
八八八
五二番

振替口座大阪一二八三八番

新聞廣告
火災保險

代理業

株式會社

萬年社京都支店

本店 大阪市高麗橋五丁目
支店 東京市銀座二丁目



京都日日新聞

京都の誇る代表紙！

京都人の読む郷土紙

朝刊八頁・夕刊四頁

一ヶ月 九十五銭

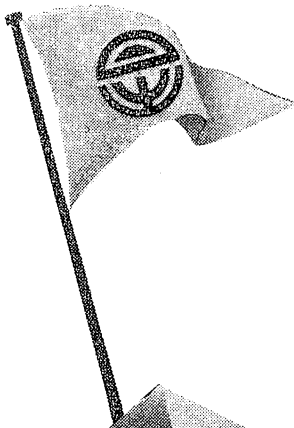
京都日日新聞社

京都市中區丸太町南大入倉町

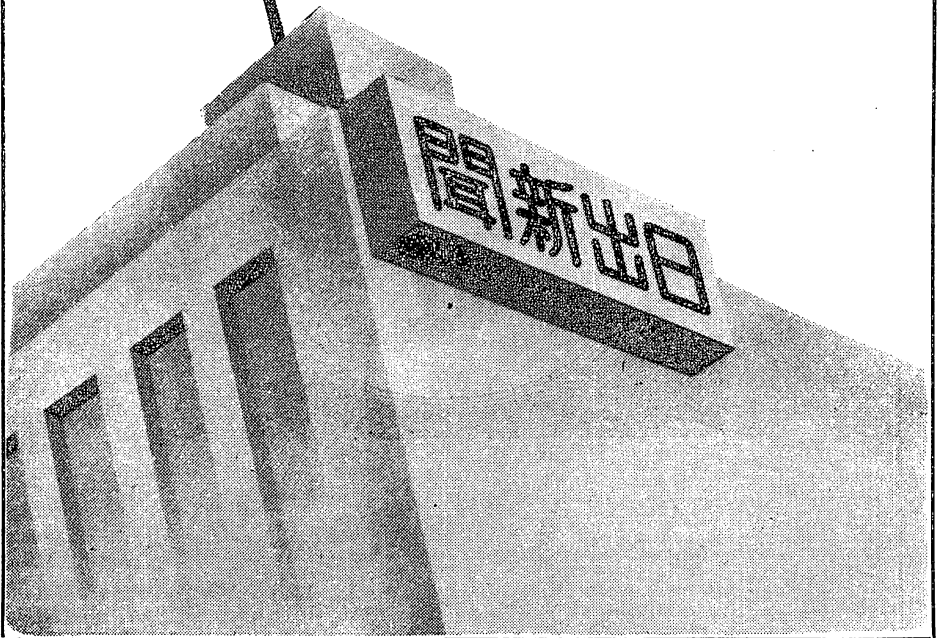
時局下にその真價燦たり

京
都
日
出
新
聞

六十餘年の傳統ゆるがず
京滋最大の信用を語る



日
出
新
聞



新新聞雜誌廣告業

大阪朝日新聞(京都版)廣告一手扱

京都市中京區三條烏丸東入



株式會社 京攀社

電話本局代表三一三番

支店 東京・大阪・神戸

▼御一報次第夜間ニテモ社員參上▼

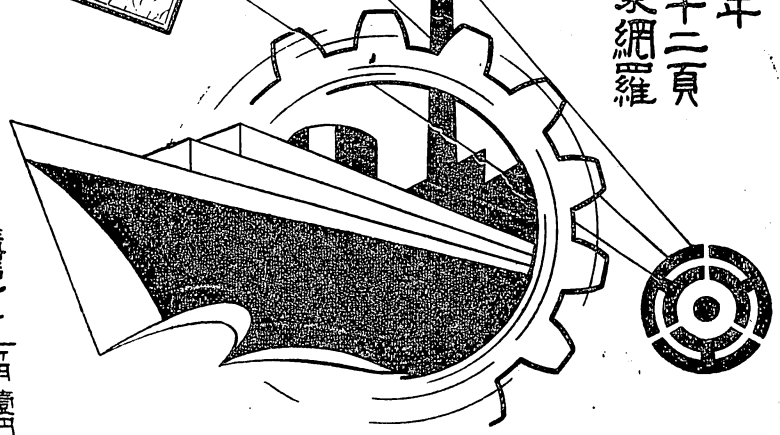
國威と共に

伸び行く本紙



創立廿五年

本紙十二頁
全工業網羅



購読料
一月壹円廿銭
六月七円

日刊工業新聞社

大坂中之島・東京銀座

金鶏印罐詰 二大製品

- 1、純良精選の牛肉
で御座います
- 1、不意の御來客に
- 1、御酒ビールの御友に
- 1、キャンピングに
- 1、ハイキングに
- 1、各地百貨店
著名食料品店
に販賣致して居ります
- 1、キンケイ印を御指定下さい



洋酒・食料品・罐詰問屋
 大阪市東區豊後町三番地
 株式会社 横山商店

月刊・演劇研究・雑誌

演 藝 類 編

第 十 四 年 二 月 號

藝 術

舞臺監督は如何なる戯曲を如何に演出しても構はない。唯その結果が藝術になるかならぬかが問題である。

與へられた戯曲を如何に正しく批判し得ても與へられた曲中人物を如何に精しく解剖し得ても、それで舞臺を藝術にする事は出来ない

—— 小 山 内 薫 ——



宗教劇・高僧傳

高 谷 伸

どこの國の演劇史を見てもその發祥に於て宗教と關係の深いことは否めない事實である。

歌舞伎に於ても出雲の阿國の念佛踊に就いて考察すべき問題は多々ある。しかし與へられた問題は創始期の演劇形式ではなく略々完成した後に於ける宗教劇のことである。

初期淨瑠璃に見る清水寺利物語（延寶六年）達磨の本（貞享四年）多田院開帳（元祿八年）因幡藥師傳記（元祿十三年）といふ種類のものもあるが、もつと後世の宗教劇といふよりは高僧傳に屬するものの方が興行價值を高めたと見るべきである。

高僧といふよりも佛教草創である釋迦に就ては近松が元祿八年に「釋迦如來誕生會」を書いてゐるが、歌舞伎では釋迦八相倭文庫の方が多く行はれ、これは操りでもあるが現在傳へられてゐるのは檀特山の場だけである。檀特山といつても一谷嫩軍記の組討ではない。本當の檀特山の憂き

別れで釋迦が悉達太子として入山の時に車匿童子と惜別の場で、數年前文樂でも出たが、芝居では青年劇の京都明治座時代に見た記憶がある。近來の釋迦劇では早川雪州らが浪花座で上演したが、十二月に素肌の多い芝居はかなりお寒いものだつた。これをそのまま京都へもつて來たのが翌年の二月廿六日、二二六事件の日だつたと思ふ。

高僧傳として近世の演劇史を飾つたものは先代中村梅王の日蓮だつた。これは勝諺藏の書いた「日蓮大菩薩眞實傳」で明治十四年十一月中の芝居に書き卸されたもの、當時の福助が別看板で日蓮に扮し庵が延三郎、座頭が瀧十郎、書出しが先代壽三郎、上のトメが琥珀郎、下の書出しが梅太郎といふ一座で、梅王が法華信者だといふのを看板に宣傳大いに努め藝も眞摯そのものだつたので大好評だつたが、興行者としてはその前年角の芝居で齋入が「御文章石山軍記」で眞宗とタイアップしたのに追つ冠せるといふ政策も

含まれてゐたのではないかと思ふが、信仰と藝の熱で日蓮記の評判が大變だつた。従來日蓮記といへば鵜飼の勘作が一番人口に膾炙してゐたところだつたが、史實から見ても國難に直面して獅子吼した日蓮の奮闘は高僧傳中の一番劇的なもので、近くは坪内博士の法難で東儀鐵笛の日蓮も印象に残つてゐるし、武者小路氏の作だと思ふが左團次の日蓮を明治座で見たこともある。

淨土信仰の方面では倉田百三氏の「出家とその弟子」が一時評判をとつて、舞臺協會その他で上演されたが、法然上人のものは美作誕生寺の漆間徳定師が五段物の淨瑠璃「法然上人恵月影」を書いてこれを京都で身振芝居として上演したことがある。大正末年で私もその演出に與かつた。

親鸞上人には古るい所で梁塵軒が寛延元年に書いた「華和讃新羅源氏」が操りに用ひられ、劇中の主人公新羅丸が親鸞上人で、白骨のお文といふ腰元がそれに殉ずる三段目などは白骨の御文章をオクリに取り込んだりしたなかなか洒落たものである。「祇園女御丸重錦」——例の三十三間堂にも多分に宗教色がある。

吉崎御坊の肉附きの面も「嫁嚇し」として齋入(右團次)の當り狂言となつた。明治劇壇を見ると、福助の法華と右團次の眞宗との對立といふやうな點も見えるが、連獅子の

間狂言に宗論が出るやうなものでもない。

鷹治郎は眞言宗といふ譯ではないが、弘法大師をその年忌に大阪歌舞伎座で演じたのは昭和九年三月だから讀者の耳目に新しい所であり、その年の暮に歿したのである。

その他見眞大師一代記などといふものゝ小芝居で出たこともあるし、ワキ役として名僧智識の出ることも多いが、信仰なり高僧なりを主題としたもので重要なものはざつと以上のやうなもので、明治期を中心に大正、昭和と大體に於て宗教的色彩の劇は下り坂にある。

挿話的に面白いものを紹介すると十餘年前に宗教劇と銘打つて執念の蛇のやうなものが解説するといふ文字通りのジャ劇があつて、一座を統率するものが安藤大僧丈といふのであつた。丈の字が實にユカイである。

その他江戸後期のもので近頃流行の清元の「色彩間刈豆」の祐天上人も一ト役買へるし、常磐津の「三世相錦繡文章」の墮地獄の場なども洒落た意味の宗教劇かも知れない。

天理教や基督教にもそれを背景とした脚本はあるが、大劇場で問題になつた作はすくなくあつたにしても、本筋でなく脇筋に絡んでゐる程度のものである。インチキ宗教に就ては先般新築地が中座で出した「徴」などは面白いものだつた。



役者と信仰

伊 臣 眞

梅玉の日蓮上人

△私が初めて芝居と謂ふものを観たのは、東京浅草鳥越に猿若さるわかの由緒深い中村座が新築されて、初開場に大阪から中村福助（先代梅玉）市川荒五郎（五代目團藏門弟）實川芦雁（先代延若門弟）を迎へた興行の二の代りに、「日蓮大師眞實傳」を演じた。五十年もの昔明治十九年十月で小學生だつた幼い眼に残つたのは、佐渡ヶ島配所の寂しい場面が、其儘がらみ籠燈かどうが返しに舞臺一面が巨きな口を開いて撥ね上ると、灯の入つた提灯が澤山ブラ下つた身延山開帳の場面で大勢の講中が團扇太鼓をたゝいた華やかな場面であつた。先代梅玉は豫て法華宗に歸依して、日蓮記を此前後

にも度々演るに従つて信仰の念を高め身を蕭み戒めて、役者稼業に似合はぬ清淨な生活を營み、物質精神共に安らかな一生を送つたのは信仰の賜と言ふべきで、彼が其舞臺の上にも敵役を生涯演らなかつたと云はれたのも、其信仰念がさせたのであらふ。併し假令彼の柄や技巧が敵役に適應しないとしても、役者として舞臺に立つ以上彼の演技的良心が餘りに消極的であつた事は否めない。

最上位稻荷様が仁左衛門を紹介

△先代十一世仁左衛門も日蓮宗に歸依して、歌舞伎の舞臺で斷えず出て來る「南無阿彌陀佛」と言ふ臺詞、殊に得意の老役では始終これを口にせねばならぬ場合に逢着する

が、強情な彼はその臺詞になると、一段響を勵まして「南無」と言つて、あとは唇を動かして……と飲み込んでしまふのだつた。彼は備中の最上位稻荷を信仰して、東京轉任後は芝の支社へ參詣して居たが、大阪時代には月詣りを缺かさず、自分が往けなければ必ず代參を出して居た。

△大正中期麗らかな秋の一夕、岡山驛から上り列車に乗つた私は、其處に仁左衛門夫妻と現我當の千代ボンが、稻荷詣での中國線から乗り替へて居るのを發見した。座席室は私と四人限りで、先方は此方を知る筈もないが、私は客席から計り見る此古老俳優と語つて見たく、無躰にも「最上位さんへ御詣りですか」と口を切つたら、妻君は如才なく應答をするし、十三四歳の千代ボンからは切りと大好きな汽車に關する質問などを受けたが、仁左は苦り切つて吻と鼻の先で應對して居たが、私の執拗な劇談に逃げ場所も無い夜行列車の内なので我を折つて「アンタはん芝居の事も理解りまん、面白い妙な御方やなあ」と碎けて來て、劇界の狀勢役々の苦心談など響きの應じるやう質問に答へたが、段々背が乗つて聲高に成り、彼の産れた淺草猿若町

(當時の劇場街)時代の役者生活の裏面、中島座に現吉右衛門の父時藏、多賀之丞の義父鬼丸等との若手芝居の思ひ出、或は最近幕内の秘話等、耳新しい事や記録にも無いやうな、芝居好きには貴重な話材の數々を披瀝した。手振り身振り交りの講演が私一人で聴くのは勿體ないやうな氣がしたが、會々一枚の境界扉が開いて居たので、隣の寢臺室から、大家の御隠居らしい老夫婦ともう一人の年寄が衣を改めて這出して來て、失禮ですがと聽き人に加はつたので、更に明治維新時代のドサクサで人心不安の折柄、何處へ行つても芝居興行どころでなく、御難續きの旅あるきに、作州津山の興行最中筵旗竹鎗の百姓一揆に襲はれ、舞臺の扮装の姿で難を免れたが、遂に其夜は金ピカ姿の衣裳で野宿した話など興味は中々に盡きなかつたが、話央ばに汽車が大坂へ着いてしまつたので、仁左一行も津山受難のやうに倉皇たがふと下車したので、此方も名乗る隙も無かつたが、翌月は彼が帝劇へ出動したので、廊下で逢つた千代之助に、「御機嫌よう何日東京へ御越しで」と訊かれ有耶無耶に返事をしたが、後に此方の姓名も暴露して、それ以來舞臺外

の交友を結ぶに至つたのは、全く最上位稻荷様の御引合はせであつたのだらう。

大教正市川團十郎

△調べも研究もしないから解からないが、一般家々の宗旨は全國的に眞宗や禪宗が多くて、法華宗は數の上で些いのではないかと思はれる。本願寺さんを地元を持つ關西と誕生地が東海に在る日蓮宗とが、夫々東西に分野して居るのではあるまいか。南無阿彌陀佛が普遍的だから、却而法華を信仰する方が眼につくのかも知れない。

△東京の役者で非南無阿彌陀佛派を思ひ付いた儘擧げて見ると、市川團十郎は家代々の宗旨は何であつたか知らぬが、彼自身は神道井上派の信者で、明治卅六年死去と共に教會から大教正玉垣道守彦と云ふ靈位を贈られた。彼の門人中での神道信者は私の知る處では現市川男女藏の父市川門之助位のものである。

△盟友五代目尾上菊五郎は菩提寺が本所押上大雲寺で、團門の市川中車は昭和六年忠臣藏の薬師寺で卒倒して以來平素信仰の日蓮宗の功力に継り、熱海の小林法蓮師の教へ

を受け、發病以來五年目の昭和十年秋歌舞伎座に登場、病氣快方再舞臺に立つ事を得たのは、御教の賜と龍の口法難の日蓮上人に扮して無事演了し、再靜養を續けたが同十一年七月安らかに蓮華の花と散つたのである。

中村吉右衛門勝利蔵符

△法華の御題目を旗印にした程の加藤清正役を專賣にして居た市川中車と同じく現代隨一の清正役者中村吉右衛門も、又熱心な、日蓮信者で、清正公様への參詣怠りなく、昨今彼が住む牛込の町内から續々出征者がある毎に、彼は親しく其家を訪ひ芽出度き門出の勇者に清正公の勝守を贈呈する事を怠らない。前記仁左衛門の日蓮宗は片岡家の傳統かとも思はれるのは、九代目仁左の門弟で速くから東京役者であつて片市と呼ばれ、團十郎の曉雨を向うへ廻して逸見鐵心齋を演つた立敵役者の先々代片岡市藏も、樂屋の仇名は「御題目」と呼ばれた程、始終南無妙法蓮華經を唱へ誦して居たそうだ。

金神様の御利益

△劇壇の大御所中村歌右衛門は、團十郎の感化を受けた

爲かどうか解らないが、神道但し金光教の信者で備中の金光神社へ始終代參を立て、家庭でも朝夕禮拜して居る。世間では何等の根據も信念もなく、全く無關係な〇〇大臣××公爵△△大將が信仰して居るから、吃斐靈現顯著いんさつだらうと言ふ頗る手頼ない氣休めの爲めに、其教團に越る者が多い。況して梨園國では其道の統領が信仰するならと、無條件に信者と成る者もある、内には拜んで置けば二重に御利益があるかも知れぬと考へる利口者もあつて、可なり澤山の信者があるらしい。

迷信で身き亡した名優

△無理解な妻女の自由になり過ぎて、重病に罹つても醫者にもかゝらず、只管信仰の金光教に縋つてのみゐた妻女の迷信で、是からといふ惜しい將來をあたら五十に二つも間のある歳で葬つて仕舞つたのは、返へすかへすも劇壇の痛恨事であつた。顔面は麻痺して口が利けず、鼻には腫物が出来て胸の病もある彼を、金神様一點張りで療治をしなかつたと云ふは何たる無智な世界であらう。初めて大阪で入院した時は已に手遅れで如何ともし得なかつたといふ。

守田勘彌は有名な興行師の子で、兄は現阪東三津五郎、父も兄も自分も經濟上の破綻を醸して金錢には恵まれなかつた。此勘彌は、俳優としては多分の天分に恵まれ、父が死生を共にした新富座で明治廿三年逆櫓さかづりの遠見の船頭に扮した。六歳で初舞臺の坂東三田八の名は、好劇家が子供芝居でそれから注視の的とした所で、卅九年十一月は思ひ出の新富座で十三世守田勘彌を襲名した。

△菊五郎、吉右衛門の市村座に、兄三津五郎と共に出演するやうになつて、漸く彼獨得の持味を發揮し、帝國劇場に入るに及んで用ゐられて縦横に其素質を發揮したのは蓋偶然ではない。彼の身上はあの昔の錦繪にあるやうな長い腮と輪廓のはつきりした顔である。此大時代の顔はどんなに縹渺たる夢幻味を漂はせたか知れぬ。爽やかな辯舌熟練した舞踊、和事師として忠兵衛や維盛の如き柔か味たつぶりの演出、加ふるに敵役本道も行け、老役もよく彌陀六など上乘であつた。純舊劇の二枚目役者であるにも係らず、明確な頭腦と尖つた神経を所有する近代人の典型たる彼は、歌舞伎以外に新しい劇を消化し得る卓越な技能を持つて居た。此點新人勘彌として洋々たる前途が拓けてゐた

ので、新劇運動の文藝座で上演の各役、悉く才人の閃きを
表はし「忠直卿行状記」の忠直、ハムレット、ジャンバル
ジャン、「チヨコレート兵隊」の士官、「良寛と子守」の
良寛、机籠之助など他の摸し能はざる技能を見せた。舊劇
も蝙蝠安や堯心をやれば松助とは別の味があり、「太十」
の久吉が幕切れの錦繪模様彫塑美は未だに忘れる事が出
来ぬ。(本項拙著「観劇五十年」より)

× × ×

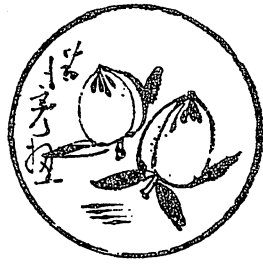
△此外何々教、何の道、御月様、御星様、最近東京には
繁昌する「お猫様」迄出現したから鯛の頭も信心と渴仰す
る役者も澤山あるに違ひない。

△誰でも始めて體驗した事や、自身が接觸した第一印象
程感銘深いものはない。毎年季節の交はり期どきに口にする山
海の食味でさへ、七十五日生き延びるといふ位であるのに、
東京住ひの私が初めて観た芝居の中村福助の扮した日蓮上
人の舞臺姿は、五十年経つても私の臉の裏に焦げ着いて離
れない。(完)

◇ ◇
□小太夫の月形半平太

行友李風氏作の「月形半平太」は故澤正の代表的
狂言、これによつて澤正なるものが認められたのだ
が、一片の幕末史で時局に則したものであるところ
から今度の角座新舊合同劇に小太夫がこれに扮し、
梅野井の藝者染八を向うに廻して、澤正とはまた別
な風味を感じさせてゐる。

◇ ◇



鷹治郎の倒れた頃

高 安 吸 江

今年までをれば八十歳、その四年前の二月に亡くなつた成駒家鷹治郎の追慕興行が今度催されましたが、大阪での最後であつた権太を見て観客はどんな感じがするでせう。

昭和九年十二月の四日でした。大毎のY君が電話で、鷹治郎の休演を報らしてくれました。程なく時事のT君が来る、朝日からも電話がかゝつてくるといふ騒ぎですから、それではと早速京都へ出かけました。

東山松原の停留所を二三丁東へ上ると、恰度八坂の塔を眞北に見る南側の松田旅館、そこが名優中村鷹治郎丈の隠れ家で、先づ同夫人、その他から、これまでの経過を聞く

とザツとこうです。

いつか下で勸進帳の富樫を勤めたときふと左脚が浮腫するの^{じも}に氣づいたのが抑の始といふことですが、此事は何年も前から聞かされたので私も時々診察の都度、あの急病で梅忠を休演した時などもよく氣をつけてゐたが、確な原因は判り兼ねました。

昭和七年の冬に偶然A醫師が左の下腹に塊りを見附け、翌八年からレントゲン治療をうけたが、成程塊りは小さくなるが疲労が烈しく、それに食慾が無くなるので、時々中止しながら治療を續けてゐた處、九年の春頃から右腰の邊

に神經痛が起り、又肝臓の邊に握拳程の硬結が出来ました。

それで十月の權太はともかく演り終せたが、十一月名古屋から金澤へまはつた時は方々へ浮腫がきて起居も不自由になり、盛綱などは大分扇が介添をしてゐたそうです。

白井さんが休めと云たのを強いて出演した顔見世には、既に稽古の際よりきざしてゐた鞞丸の腫れが急に著しくなり、軽くは作られても鞞だけに身體の自由を妨げること亦一しほで、花道の駈出はとにかく、佐々木の出に井戸へ向いての見得などは腰が上らず非常に苦痛でした。そこで二日は軽い鞞を用ゐたが、浮腫が殖えて益々動作が意の如くならず、三日目にはいろ／＼仕草の手順を工夫してみましたが、やはり病状は進むばかりで折角の苦心も寸効がなし。

白井さんの忠言さへも聞かなかつたのであるから今更休めと云ても駄目と思ひ、形は良いが聲がさつぱり出ぬ故、せめて三日位休んではと云へば、「三日やなア」と念を押してやつと承知し、歸りがけには魁車に代りをと聲をかけた程の周到さであつたといふ、尤此れは後日S女史から聞

いた話です。

奥の間で机をへだて、向合ふと、腹から下は布團で隠れて居るから貧血で少し腫れ氣味の顔以外、さして衰へも見えず元氣であるが、横臥すると、神經痛が烈しく、座れば軽くなるか或は治まるので、常に座位をとる故睡眠が出来ない結果、時々鬱々と眠つてはまた醒めて話すといふ、極めて痛々しい状態でした。

「三浦位の役で休むのは残念です。しかし脚が腫れてゐると中々形がつかず困りました。三浦の役は十次郎と違ひ、長門守だつきかい、シツカリした處がいろいろ。母の病氣を柔じたのと、その外に佐々木と約束した通り、計略が巧いこと行つてゐるかどうかと、いつも其心が無いといきまへん。氣がついて傍に姫が介抱してゐるのを見て、ア、來てゐるな、そんならよしと安心する腹が入ります。門口で倒れる前、矢を抜き、其血を骨める型をやるかと思つたがやめました。以前此役を腹切つて來る人もおまじしたがエライハキ違ひです。」

「紙治の稽古のとき中車が孫右衛門でしたが、急にヘナ／＼と脚がきかんやうになりました。六代目は自分が代

るわけにもゆかず困つたなど云うてゐましたが、とう／＼勘彌が代ることになりました。中々上手でよう演りました。が、新聞では番頭やと評してました。

幸四郎は此方から巧く持ちかけて、向ふの演りよいやうにばつかりしてましたさかい、案外好評でした。」

話は例の通り次から次へと中々盡きないが、疲勞を重ねてはソコ／＼に切り上げ、御馳走された鯖鮓を「一ツどうだす」と勧めたら、美味そうに二夕切も喰べました。食慾はまだ可なりあるらしいから先ヅ當分は大丈夫と、折柄夜の部へ出演のため芝居へ出かける芳子嬢と同車で辭去しました。

その芳子も今年はまだ廿歳で、「歌しぐれ」ではないが、そろ／＼お嫁入盛りとなりましたが、娘成駒家として可憐な腕を一生懸命に振つてゐるのは喜ばしい事です。しかし冬枯の清水阪と同じく、思出深き如月の餘寒酷しき幾夜を泣き明かしたか、あのウダ腫れた眼瞼を見て私は斷腸の思を禁じ得ないといふにも、更に故人を憶ふて新愁を覺えました。

鷹のかけ

初芝居大阪の持つ鷹、治郎

月 斗

朧月魂ぬけし後影

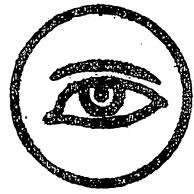
蓬 吟

梅散つて淋しき鶴の林かな

吸 江

河庄の掛行後に影は消え

百 樹



鴈治郎の偉さ

富田泰彦

「鴈治郎の偉さ」——さう云つたことについて何か感想を

書いて呉れとの編輯子の御注文なのですが、それは今更
「太陽の明るさ——」を語れと云ふのと、同じで、今更い
ろくな形容詞をつらねて讚美すること、既に迂愚の至り
とさへ思はれます。鴈治郎の足跡の餘りに偉大すぎたゞけ
に、その歿後の大阪劇壇の趨勢を、じつと考へさせられる
ものがあり、今に年々歳々追慕興行となつて歌舞伎國の春
の魁けとさへなつてゐる態です。

× ×

私は、いつも鴈治郎が不世出の名優として、その一生涯
を完からしめた、彼自身が舞台の不斷の精進さと共に、そ
の名優を庇護支援しつくした白井會長の隠れた功績を認識
しなければならぬと思ひます。單に興行者と俳優の關係
といふ以上に、あれまでの熱意があればこそ父子兄弟以上
の交誼が、彼の藝術を透して、日一日、年一年とその緊密

さを加へたものです。

× ×

我國歌舞伎史が、いつその終止符を打つ日があるかは、
勿論未知數ではありますが、恐らく鴈治郎ほどに、華やか
な一生を終つたといふ時代的にも恵まれた名優は、もう二
度と出ないであらうと信じます。否、今後に猶幾多の鴈治
郎が續出して欲しい願望を持ちながら、「鴈治郎と白井會
長」とほどの情意投合した關係に置かれる「人と機會」と
は恐らくめぐり來ないだらうと思ふものです。

× ×

併し、私は決して失望はしない。鴈治郎と云ふ巨星が、
たとへ殞ちたればとて、大阪劇壇は時代とともに、又新し
い輝きを放つであらうと期待してゐます。歌舞伎は何かの
形式によつて存続して行く以上、決して失望しては不可な
いのです。興行者も、俳優も、さうして觀衆も、氣を描へ

て次の時代の鷹治郎の出現を待たうぢやありませんか。たゞ何事にも「熱誠」といふことを忘れてはなりません。

日本は、今や總親和内閣の出現によつて、興亞の春を謳歌しつゝ大陸へ大陸へと飛躍すべき羽搏きをしてゐるのです。祖國を愛すればこそ、この飛躍の原動力は、傳統の歌舞伎と共に、脈々と、この世界に誇るべき國民性が培はれて行くのです。日本の文化も、思想も、道徳も、これらの名優の演技に教へられるものは鮮くないのです。即ち優れた芝居と、名優を見ることは、強ち享樂的な方面にのみその機會が作られるものと思へば間違つてゐます。偶々鷹治郎追慕興行の如き契機が設けられて、其處に俳優も觀衆も渾然と融合した劇場風景の親和的な雰圍氣を醸し出さすやう努力したいものです。

若し強ひて「鷹治郎の偉さ」といふものを考へるならば以上の如き理由によつて、この追慕興行が、年一年と大阪人に取つては意義深き行事として、もつと一般的に關心を持つまでの盛大さに擴充さして行くやうに努めたいと思ふ——鷹治郎に就いては既に、幾度も語りつくされてゐるから、斯かる取りとめの無い隨想を以つて、私の責めをふさぐことゝいたします。

スセロフ
作製板看術美

社事商告廣

るゆらあ
告廣傳宣

造勝中田

前日千阪大

番〇九七三戎電
ルタナミ



延若の權太

篠山吟葉

如月の歌舞伎座は鴈治郎追慕興行とあつて、一番目に、「義經千本櫻」の道行と鮎屋、川連館の三幕を出してゐる。重なる役割は義經が宗十郎、靜が扇雀、忠信・梶原・覺範が猿之助、彌左衛門・川連が市藏、維盛が魁車、お里が鶴之助、母親が姪女などで、權太はわが延若である。

序幕に据ゑた道行の場は、文樂座の太夫三味線六挺六枚の出語りで、あの大舞台一面に吉野山花盛りの景色、而もこの大道具が三ばい替つて上手に吉野川の流れを見せ、始めて靜の出になる、この座ならではの豪華絢爛の舞台である。

去年忠臣藏の道行では宗十郎の勘平にお輕を附合つた扇雀は、今度の靜でも鮮やかに踊る。踊り手の少い關西歌舞伎に愴うして宗十郎や猿之助と一緒に踊る人を見ると力強

く頼もしい。猿之助の達者なことは言ふ迄もない、だがこの幕切れに寶珠の玉の衣装に引抜いて、多勢の黒衣に狐火を出させ狐振りになつて引込む趣向は、道行の場一幕だけの出し物なら兎も角、今度のやうに大詰川連館のある場合は底を割るやうで奈何かと思ふ。元々鳥居前で忽然現はれた際も作者は狐の化身といふ様子を見せてゐない、母の病氣看護の爲め生國出羽に下つてゐたのが、君の大事を聞き夜を日について都へ馳上つたと説明してゐる。だからこの場は花道から驪あがつた位に止めておいて、後の御殿で本性を現す方が得ではあるまいか。沉んや前月の中座でも、小笠原の序幕に魁車の菊平が多勢の子狐を使つて、派手な狐六法で引込んだのと同巧に見えて損では無からうかと思ふ。

慾を言へばこの場の前に伏見鳥居前があれば初音の鼓に執着する狐忠信がよく判るし、靜の旅も鼓や着長きながを携へて居る譯も見物に得心が行くだらうが、それは出来ない相談としても時間の都合がつけば鮎屋の前に椎の木の場合は是非つけて欲しいと思ふ。鮎屋を單に古典的の歌舞伎狂言として一幕出すならば兎に角であるけれど、干本櫻の筋を充分に知らぬ若い人達には椎の木があつて鮎屋に續くと、いろんな事が判つて一層興味が深からうと思ふ。

中幕物には單に其一幕きりで然のみ前後を必要としないものもあるであらうが、鮎屋などは椎の木が前に無いと、彌左衛門が奈何して首を持つて歸つたか、その首が何者の首だか、首に前髪があつたか奈何か、鮎屋に於ける簡單な白びやくだけでは見物に充分得心が行くまいと思ふ。第一、權太が何時改心をしたのか、三貫目の銀かねをいたぶつても何爲グズ／＼して居たか、合圖に吹く一文笛も、巾着に頬ずりをする件も、手負ひに成つてからの權太の白だけでは不充分では無からうか、殊に若葉の内侍や六代君が二人切りで都から此處へ来たやうにも見える。

これが椎の木があれば悉くよく判つて、權太改心の動機も、妻子に對する愛着も得心が出来て、鮎屋の場が一段と

引立つであらうと思ふ。

椎の木必要論は前にも言つた通り干本櫻をよく知らない人達への爲であるが、それは別として延若の權太は當代に於て第一人者と自分は信ずる。柄からして滅法可い、最初の花道の出から全く其人に成り切つて居る。山中の小都會——下市あたりのやくざ者其まゝである。

やくざ者とは言へ鮎屋の息子で、まして親は前身が歴きとした武士であるからといふ解釋からか、往々小粹こせいに作る優もあるやうだが、それは違つてゐる。成程父親の彌左衛門は重盛の家來ではあつたが、親重代田舎の鮎屋の悴だ、その悴が平家世盛りの頃都に出て重盛の家來となつた、そして唐土育王山へ納める祠堂金の宰領を仰せつかつたは可いが、其金を音頭の瀬戸で盗み取られてクビに成り、田舎に歸つて侍は懲々したと元の鮎屋に復つた彌左衛門だ。それから田舎娘を娶つて産れたのが權太郎、だから權太は正眞正銘紛れもない田舎の小悴である。それが始末にいけないうやくざで、惣領でゐながら勘當されたといふのだから、延若の柄も拵かぶへも科も全部其人に成り切つて居る。完璧のものだと信ずる。

同じ兄妹でゐながら鶴之助のお里は少々現代染みはしな

いか、殊に其着つけに於いても那様氣そんげがする。お里役では私は雀右衛門が近代に於ける壓巻だつたと思ふ。鶴之助は美しく可憐ではあるが、京屋はアノ野暮ツたらしい顔立、而もつゝましやかな拵へで、科白に於いて充分の色氣を見せた。愚圖々々する彌助が小ぢれツたく、格子戸から外に出て「お月さまも、もう寝ねしやんしたぞえ」と振り仰いだ容かたちは今も目に残つてゐる。全く京屋は名優であつた。

魁車の彌助は花道の出が少し弱々しくは無からうか「慟巧で伊達で色も香も、知る人ぞ知る優男」ではあるが「噂さ半ばへ空樽荷ひ……」で、多寡が鮎あなづなの空樽二つである、いくら肩に物を載せた経験がない三位卿とはいへ足の踏めく氣づかひは無いと思ふ、一考ありたい。それに袖なし羽織の模様も少し派手では無からうか。

こんな小穿鑿はやめて、今度の千本櫻は久し振りに好い出し物であつた。三幕いづれも好いが殊に鮎屋がいゝと思ふ、さうして就中延若の權太が當代の逸品である。私は飽まで權太を獎賞し禮讚する一人である。其他の優々ひたひた、孰れも力演熱演で素晴らしい舞台であるが、唯一人、名優梅玉丈に役の無かつたのは物足りないやうな氣がした。

『鮎屋』の配役

い	が	み	の	權	太	………	延
親	彌	左	衛	門	………	市	藏
彌	左	衛	門	女	房	………	若
娘	お	お	里	………	………	之	助
下	男	彌	助	………	………	之	車
維	盛	御	塚	若	葉	ノ	前
若	君	六	代	………	………	錦	吾
權	太	女	房	小	せん	………	年
粹	善	太	………	………	………	………	仙
梶	原	平	三	景	時	………	幸
………	………	………	………	………	………	………	助

□ 中座の五郎劇

晝の部には「二本棒」「春の夢」「湯の街」「上と下」、夜の部には「無閑マダム」「心の渦巻」「慰問文」「若き日の影」の八種を御目見得狂言として上演したが、中にも新作慰問文は近來の傑作で、應召軍人の家庭と漫才師親娘三人暮しの住居を見せ、子供の慰問文の純真さが、すべての世の醜きものを淨化してしまふといふテーマ、單純ではあるが興味深く、芝居も手際好く運ばれてゐた。

新舊合同劇の新意圖

「沙羅乙女」に新劇的な演出

角座に新春以來、立籠つて熱讚を博してゐる新舊合同劇は一日第二陣に、問題の小説「沙羅乙女」を劇化上場を敢行、脚色は鳥江鏡也氏で原作を尊重し、ビルディング内の洋菓子屋のコックと煙草屋の賣り子など現代の比較的新しい職業戦線に活躍する、生きた題材に特別の重點を置いて脚色され、これが舞台への再生に當り、その新劇的な演出に、大いに好評を博した。

一般宣傳廣告の御用命は

迅速丁寧親切低廉主義の

弊社に御利用を

岡本商事社

大阪市住吉區住吉町一六五八

營業所 大阪市南區高津末廣橋西詰角

役者氣質

—延若の權太に就いて—

坂本猿冠者

てゐる、院本に忠實な權太を見せるのには東京の役者では駄目だ、關西の役者に於て、始めて表現出來ると、口では云はないが、心では確にさう思つてゐたに違ひない。

鷹治郎の追善劇に延若が權太を見せるが、鷹治郎の權太は當人も自負があつた役であらう。紙治や梅忠ほどではないが、晩年までよく上演してゐた。併し東京では遂に私が知つてゐる限りでは上演しなかつた。

これは鷹治郎が持つて生れた利口さが東京上演を差控へさせたに違ひない。と云ふのは、東京には五代目菊五郎の權太と先代團藏の權太が代表的になつてゐて、好劇家の眼底に残されて

る上に、現代の菊五郎、羽左衛門と云ふ權太役者が光つてゐるから、鷹治郎

としては、それらを對うへ廻して、俺の權太はどうだと對抗するには、彼の利口さが臆病にしてしまつたのではあるまいか。關西役者でなくては表現出來ない紙治や梅忠なら羽左衛門何者ぞ、六代目恐るゝに足らずと云ふ自信が持つてゐる鷹治郎が、權太を東京で上演しなかつたのは、その自信が、紙治や梅忠だけ持てなかつたためではないかと思はれる。

其處へ行くと延若は度胸がいゝ、權太は江戸の者ではない、大和下市村の與太者だ、五代目型と云ふのが間違つ

權太役者の羽左衛門を彌助に廻して見せたのだから豪い。延若が歌舞伎座で羽左衛門の彌助を對うへ廻して見せた時に、虚實は解らぬが、こんな噂があつた。松竹の重役某氏が羽左衛門の部屋へ行き、彌助の古今無類をほめたついでに延若の權太を絶讃したら、市村が急にお冠りを曲げたと云ふ事であつた。こゝに市村の役者氣質が現はれてゐて面白いと思ふ。

と云ふのは、いくら延若が器用でも權太は俺以上のものを見せられまいと云ふ自負があつた。彌助の役は延若で



も出来るが、俺は延若以上の彌助を見
せてやると云ふ野心もあつたに違ひな
い。處が、裏の人が權太をほめたので
は市村の壺にはまらない、これではお
冠が曲る譯だと其頃噂された話題であ

つた。

前にも云つた通り事の虚實は解らな
いが、いかにも役者が持つてさうな氣
持の話として面白い。

鷹治郎が東京で上演しなかつたのも

延若が羽左衛門を對うへ廻して上演し
たのも、要するに役者氣質の一面を物
語つてゐると思ふ。

今度追善劇に延若が權太を演るに就
て、フト思ひ出したまゝ書いてみた。

洋 食 料 品 酒
罐 詰 問 屋

株式 會社

横 山 商 店

創業明治五年

大阪市東區豊後町三番地

電話東94代表三八六五番

振替口座大阪二八四七番

芝居と能

勸進帳と千本櫻

森 ほんのほ

芝居の「勸進帳」が能の「安宅」から出てゐることは今更言ふまでもない。併し能と芝居とではその觀方といはうか、扱ひ方といはうか、つまり演出の態度が大分に違ふ。

「安宅」の中心とする處は、前半では勸進帳の讀上げであり、後半では男舞である。芝居でも元々半所作事風の物であるから、後半ではやはり舞に重きをおいてゐるが、なほその上に幕外の飛六方といふお景物がある。前半では勿論勸進帳の條も重大視されてはゐるが、能の方で秘曲（三讀物の一つ）としてゐるのは比べものにならない。芝居の方では讀上げの間の鼓はアッラヒ程度のものに過ぎないが、能の方では特殊の謡ひ物として氣合、緩急の難しい鼓の手がこれに附いてゐるのである。併し芝居の方では勸進帳の直後に「山伏問答」がやつて来る。こゝの漸層的な掛合臺詞と兩者の動きの盛り上りが、觀衆の興味を湧き立たさすにはおかない。尤も能の方にも金剛流に「問答之習」とい

ふ小書（特別な演出）があつて、芝居の問答よりも、もつと専門的な宗教上の、所謂論議風の問答がある。芝居のはこれを簡單に通俗的なものにしたと想へば宜しい。芝居の山伏問答は七代目（團十郎）が講談から攝り入れたといふことだが、講談の問答の出所はやはり右の金剛流の「問答之習」あたりからであらうも知れない。

能の「安宅」で第一に來る要所は最期の勤の條である。この勤は關守一同への示威運動であるが、これが効を奏せぬ場合には本當に最期の勤になるかも知れぬのである。だから物凄までの嚴肅さを表現せねばならぬのは言ふまでもない。併し芝居ではさういふ威嚇的な凄じさがどうも表現されない。單に祈の形式だけで、曲節にも演出にも演技にもさういふ用意が無いやうに思はれる。

次の要所は前述の勸進帳讀上げである。芝居の方にも多少の緩急はあるが、能の序・破・急ほど劃然たるものでは

ない。而かもこれは諺物であるから囃子に合致して行かねばならない。全く芝居に無い難しきである。

第三には義經が番卒に見咎められ、山伏一同が關守へ襲ひかゝるのを辨慶が必死の勇猛さを見せて制止する——「方々は何故に……」以下の條であつて、全く義經主従が一期の浮沈の分かれ目である。芝居でもこの絶體絶命の場合が相當に表現されてはゐるが、能ほどの迫眞力を持つてはゐない。どうも外部的な表現に墮して、これに伴はねばならぬ内面的なものが不充分である。音楽にも力強さが無さう。

最後の要所は前に述べた男舞である。舞は泰然たる態度凛々たる英氣を以て舞はれねばならない。延年舞、瀧流シ、酌掛カリの小書々々に従つて舞は一層の興趣を添へる。芝居の舞にもこれらの型が攝り込まれてゐる。殊に最近の幸四郎の辨慶には能分子が餘程多分になつて來てゐる。

之を要するに芝居の「勸進帳」も能の「安宅」の要所々々を摺んで、總べてがかなり能く消化されてはゐるが、能ほどの力強さを外面的にも内面的にも持つてゐないのが甚だ残り多いのである。

(勸進帳はこれで留めて千本櫻へ移らう。)(「義經千本櫻」の二段目、渡海屋銀平實は知盛の船戰の條が諺曲「船辨慶」の雛案であるのは言ふまでもないが、諺曲に親炙してゐる者には更に「碓氷」をも聯想させる。

平家に由縁ある僧が一門戰歿の跡を弔ふ爲に長門の浦に下ると、二位尼・大納言局・知盛の靈が現はれて合戰の次第を物語る。更に源平争鬪の有様が再現され、中にも知盛は大長刀を持つて奮戦したが、遂に兜の上に碓を載き海底に消え失せる。つまり俗にいふ「碓知盛」だが、「千本櫻」の作者はこの能からといふよりは、平家物語から取材したのであらう。

次に四段目の狐忠信とその二夕親の革で張つた初音の鼓との關係は直に諺曲の「天鼓」を聯想させる。

支那後漢の代の事で、王伯といふ者の妻が夢に天から鼓が降り、それが胎内に宿ると見て男の子を生んだので、天鼓と名づけてゐた處が、其後眞の鼓が天から降り、打つと微妙な音を發した。此事が宮廷に聞え、その鼓を召されたが、天鼓はそれを甚だ惜しみ、鼓を持つて山に隠れた。併し遂に官人が捜し出し、鼓は内裏へ召上げ、天鼓の方は呂水に沈めた。處が肝腎の鼓は更に鳴らぬ。そこで父王伯を召し出し鼓を打たせると、不思議にも再び妙音を發したので、親子の情に感激した帝は、父王伯には數多の寶を與へ、また天鼓の後世を管絃講で弔はれた——これが諺曲「天鼓」の筋である。そして此筋が攝り込まれて大近松の「天鼓」となつてゐる。

これでは天鼓は樂人某の家に傳來の名寶で、(丹州四松の白狐の御臺狐の革で張つたもの)これを守護する狐の中

に伊賀の上野の古狐彌左衛門。狐とその子彌助。狐とがあり、彌左衛門狐に加勢する狐の中に大和狐源九郎の名が現はれてゐる。黒木勘藏先生はこの彌左衛門、彌助の親子狐の名が鮎屋親子の名に振替へられ、葛の葉と狐葛の葉の趣向が忠信と狐忠信に翻案されてゐると説かれてゐる。併し大和狐源九郎に就いては一言も言ひ及ばれず、「千本櫻」以前に源九郎狐の傳説があつたといふことは聞かぬと言はれてゐるが、この元祿十四年作の「天鼓」に既に大和狐源九郎の名が見えてゐる以上、源九郎狐の傳説は既に民間に流布してゐたものと見ていいと私は考へる。(話が本道から離れた。この項は一先づこれで切り上げる——)

次に五段目の「吉野山」で忠信が義經と名宣つての奮闘は謡曲「忠信」を私は聯想する。

兄頼朝との仲たがひから都落ちした義經は吉野の衆徒を手頼り身を忍ばせてゐたが、衆徒の意向が俄に變り、急に夜討を懸けるので、義經は身代りに忠信を留め、密かに間道から落延びる。高檜に上り防ぎ矢を射てゐた忠信はそら腹を切つて檜から谷間に落ち、飛鳥のやうに義經の跡を追つて行く——丁度角書にある「吉野花矢倉」に同じ情景である。尤も作者がこの謡曲に取材したか、或は義經記の義經吉野落から脚色したか、そのいづれかであるに違ひない。なほ謡曲にはこの「忠信」と姉妹曲にあるものに「吉野靜」があることを序ながら附け加へて置かう。

天婦羅と佛蘭西料理

喜久屋食堂

道頓堀式橋北詰(75) 七四八番



義經千本櫻の解説

三 木 八 十 八

今度の「千本櫻」の藝題ゲイダの上に「忠なる哉忠、信なる哉信」と角書ツノガきがしてありますが、これは初段の冒頭にある序詞で、原本に「大物船矢倉、吉野花矢倉」と割書きしてあるのを真似たので、勿論時局をも考へ合はせたのです。

「大物船矢倉」は第二段の第三場「大物浦船軍」の義經と知盛、「吉野花矢倉」は第五段の吉野山中の忠信と覺範との一騎討ちを指すものですが、今度のやうな場割では勿論この割書きは用をなさず、又これまででも人形は兎も角芝居でこれを附けることは先づ無いやうに思ひます。

さてこの「義經千本櫻」が上演されたのは今から約二百年前。作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、同じくこれらの人々の合作になる「菅原傳授手習鑑」はその前年であり、「假名手本忠臣藏」はその翌年でつまりこれらの作者

達の筆に油の乗つた時の作ですから悪からう筈はありませぬ。

「義經千本櫻」の意味は本文に「實じつにも名高き大將と末世に仰ぐ篤實の、強く優なるその姿、一度に開く千本櫻……」とある通り、義經禮讚から來てゐるのでせうが、全篇を通じて活躍してゐるのは本物と狐の忠信で、「忠なる哉忠、信なる哉信」の冒頭まくらの文句も、つまりはそれを暗示してゐるのでせう。

全篇五段十二齣、次のやうになります。

第一段

大内の場。
北嵯峨庵室の場。
堀川御所の場。

第二段

伏見稻荷前の場。
渡海屋内の場。
大物浦の場。

第三段 椎の木(下市村茶店)の場。
鯨屋(彌左衛門内)の場。

第四段 靜、忠信道行の場。
吉野山藏玉堂の場。
河連館奥坐敷の場。

第五段 吉野山々中の場。

第一の大序「大内の場」——桓武天皇の御代、雨請ひに用ひられた初音の鼓は、それ以來稀代の重寶として禁裡に留めおかれてあつたが、豫て義經が望むところである由を聞こし召され、八嶋合戦の御恩賞として院宣に添へて下し賜はつた。これは鼓の裏表二つの革の如く頼朝義經兄弟仲睦しく禁裡の守護せよとの勅詔に外ならなかつたのであります。源氏方に反感を持つ左大臣藤原朝方は兄弟を同志討ちさせん爲、この鼓を賜はつた意味は即ち禁裡に敵對ふ底意の兄頼朝を打てよとある追討の院宣なりと理を非に擡げて申渡す。義經は勅詔とある以上、申請けねば君に背き、申受くれば兄に敵對、二つの命を背かぬ爲には、たとひ拜領申しても打ちさへせねば身の誤にもならぬ鼓と、一生鼓を打たぬ覺悟で謹んで拜受し退出する。

中「北嵯峨庵室」の場——小松の三位維盛の御臺若葉の内侍と若君六代御前は、もとお館に奉公してゐた女の尼とな

つてゐるのを手頼り身を忍ばせてゐる。丁度重盛公の命日に相當するので繪像を掛け香華を供へて回向してゐると、偶々笠賣りに身を扮した主馬の小金吾武里が訪れ、主君維盛卿には未だ存命で高野に在りとの風聞を耳にしたので、早速御臺若君の供して高野に出立しようとする處へ朝方の諸大夫猪熊大之進が家來を引連れ踏込むので、小金吾は笠の荷底に二人を入れ、旅の用意の風呂敷包、重盛の繪像までさらへ込んで此場の難を辛くも免れる。

切「堀川御所」——義經の御臺卿の君(平大納言時忠の娘)の新殿で、靜が舞を舞つて御臺の不快を慰めてゐると、土佐坊等の鎌倉武士が熊野詣と偽り討手に向ふとの風聞が傳へられ、その上鎌倉評定所の川越太郎重頼が上使として來殿し、三ヶ條の不審に返答を求める。その第一に知盛、惟盛、教經の首が偽であるのは何故かと尋問するのは、後の三悲劇の伏線となるものであります。義經は三ヶ條の申開きはするが、その一つに平家と縁組みした事が問題となつてゐるので、卿の君は自殺して果てる。處へ土佐坊等が夜討を懸けるので、義經は龜井駿河を供として密かに館を落延びる。

第二「伏見稻荷前の場」——義經の跡を慕つて追懸けて

來た靜は折よく主従三人（後に辨慶が加はる）と出會ふことが出來たが、行先知れぬ旅の邪魔と、初音の鼓と着長を形見に與へ、義經は九州の尾形を手頼らんとして大物の浦へ志す。跡に残つた靜は土佐坊の家來逸見の藤太に捕へられる處へ、佐藤四郎忠信の姿に變じた源九郎狐が藤太を打殺し鼓を奪ひ返す。と、社へ參詣した義經主従が再び現はれ、當座の褒美に着長を與へ姓名を譲り、靜を同道して都に留まるやうに命じて道を急ぐ。

中「渡海屋銀平内の場」（切「大物浦船軍」の場）——
昨今こゝに逗留して日和を待つてゐる人々が義經主従の一
行と知つた銀平實は新中納言知盛は難風を日和と偽り、沖
へ船を出して海の藻屑としようとする。が義經の智謀に裏
をかゝれ、碇をかついて海中に身を沈める。この一段すべ
て謡曲「船辨慶」の翻案であります。

第三は「椎の木」から「鮭屋」——
咥と呼ばれるやくざ
者の權太郎の女房小せんが出してゐる椎の木の出家屋へ若
葉ノ内侍六代の供して小金吾が來懸かつて休む。小せんが
善太を連れて藥を買ひに行つてゐる間に、權太が旅装ひで
出て同じく此處に休むと見せかけ、おのれの荷物をわざと
取りちがへ、中括の解けてゐるのをつけ目に二千兩の金を

騙り取る。が、その騙取つた荷物の中に高位の人の繪姿があつて、それが父の家の掣同様な彌助の顔に生き寫しであつたので、これは何か仔細のあることと權太は睨んだ。

同じ夕暮、小金吾は朝方の追手に取巻かれ、御臺若君は落したが、遂に深手の傷に落命する。丁度通り懸かつた彌左衛門が小金吾の死骸を見ると、今し方梶原から打つて出せよと命ぜられた維盛の首の身代りには幸ひと、死首打落して我家へ急ぐ。

「鮭屋」の場。權太は母親に三貫目の銀の無心にかこつけ彌助の様子を探ると、彌助實は重盛の子の維盛であること、父彌左衛門はもと重盛の家來で、殊に厚恩を受けたものであること、梶原景時から豫てかくまひある維盛の首打つて渡せと命ぜられてゐることなどを知る。折も折取り違へて持歸つた鮭桶には、母からいたぶり取た三貫目でなく、小金吾の首が隠されてゐた。權太は日頃の悪い根性を改めるのは此際と、小金吾の首を維盛と偽り、己の女房俵を御臺若君に仕立て繩懸けて梶原の手に渡す。權太の本心を知らぬ彌左衛門は餘りの憎さに權太を刺す。權太が改心した時は彼の命の終る時であつた。

第四「道行初音の旅」——忠信の姿と化けた源九郎狐が

靜御前を守護して、義經が隠れ家と聞く芳野へとたづね来る。所謂景事の一ト場で、八嶋合戦に繼信討死の物語などがある。

「吉野山藏王堂の場」——一山の衆徒頭河連法眼へも義經討伐の配符が廻つて來たので藏王堂に評議が開かれる。客僧横川の覺範は表面は義經に味方すると主張し、法眼は頼朝方と偽り、互に眞の底意を見ぬき、義經が密に身を寄せてゐる法眼の館へ夜討の準備を整へる。(法眼はもと鞍馬東光坊の弟子といふ關係にある。)

「河連館の場」——母の病氣見舞の爲故郷へ歸つてゐた佐藤四郎兵衛忠信は、義經の行方を尋ねて來る。義經は堀川御所没落の際、汝に預けた靜はどうしたかと訊くが、忠信は全く思ひ懸けぬ事で當惑する。義經は靜を鎌倉方へ渡し、義經の所在を捜しに來たかと怒る。その時狐の忠信が靜の供して辿りつく。狐忠信は自分の爲に眞の忠信に難儀が懸かつた事を知つて此際身を退かうと決心するが、靜御前に與へられた初音の鼓は二夕親の皮で張つたものなので畜生ながら親の側を放れかねる。それと知つた義經は不憚に思ひ、件の鼓と源九郎の名とを與へる。狐は今宵一山の惡僧ばらが夜討懸けに押寄せせる事を告げ、報恩の爲その僧

兵達を誑つて館へと引入れ、おのれは忽然と消え失せる。
第五「吉野山中の場」——義經と名宣る忠信と横川の覺範實は能登守教經と奮戦し、忠信が組敷かれると再び狐は忠信の姿で現はれ教經を斬る。深手に弱る處へ義經が駈着け、安德帝は大原なる御母君の許で御出家を遂げられた由を告げる。河越太郎も朝方を縛めて此處へ來る。教經は平家追討の院宣も此奴のわざと朝方の首を打落し、忠信は兄の仇教經の首を打つて局は終る。

以上の通りで、本曲の眼目は三段目の渡海屋と四段目の切から五段目の吉野山へかけてであります、何と言つても傑出してゐるのは三段目の椎の木から鮎屋で、此一本の櫻さへあれば、あとの九百九十九本は枯れても差支へないと小山内薫氏は申されてをります。誠に名評と思ひます。

「千本櫻」の鮎屋

維盛は 見ても居られず海苔を焼き
維盛が 鯨こじらのとげをお里抜き
母親は 勿體ないが欺だましよい



通し狂言の演出に

ついで

Z Y 生

「假名手本忠臣藏」が通しで演じられる度に感じる事だが、今度「小笠原騷動」が通しで出たに就いて、一層深く感じた事は、即ち通しと稱する長篇脚色の根幹である筋骨を不鮮明にして仕舞ふて、改作上演される悪弊であります。之は、座付作者とか、その上演の程度、筆をとる方の落度のみでは無い、配役の都合なり、役者の演技の仕勝手による注文、或は劇場經營者の好み等々色々な問題に板狭みとなつて已むなく斯うした悪弊が、生ずるのであらう。

といふのは假に「小さん金五郎」を故大森氏が一幕物に改作せられたのを觀

て居ると、つまらぬ作と文藝家や劇評家肌な側からケナされるものであり乍ら、面白い。觀客の十中八九迄は、中には口先では、新作「鶴ヶ城」を良ろしおますと言ひ乍ら、最後の「小さん金五郎」を待かねて、この幕によつてヤレ〜と芝居らしい歡びに浸つて歸るのである。之は一幕の中に判然と筋骨が首尾一貫して表はれてゐる安心に依るのであります。故大森氏の幾多の作品は、戯曲の藝術としての準位は兎も角、この筋骨を大事に表はす事に苦心されてゐる爲に、他の新作ものよ

觀て居て、六ケしく考へねば判つて來ないやうな劇では、娛しみが半減する。結局劇場の宣傳に釣られて觀に行つた感じがして、芝居より、映畫の方が面白いのぢやないか、といつた風に思はれる。

筋骨を忘れた様な改作演出は、短篇長篇の如何に係らず、觀客に退屈を與へる。

「忠臣藏」のみが、數多の長篇戯曲中、無理矢理に通し上演されても、どうにか認められるのは、義士傳といふものが普遍的に、全日本人の頭にあつて、筋骨の大體を觀客が吞んでゐるからであらう。けれども、大衆に教育が行渡つて居なかつた時代、即ち明治時代までは、『鹽谷判官なら判つてゐるが、淺野長矩とは何ちう人じやらう』といふ問を發する者がある程、假名手本忠臣藏がハツキリ認識されて居た時代は遂うに過ぎ去つて仕舞つてゐる。

今日そんな時節の演出を、傳統して、徒らに名型だ、祖先の築き上げた

演技だ、忽かに改訂演出はならぬ等と、陳腐な心得でばかり上演されて居る故に、如何に、看板に國民精神云々と肩書されて居ても、觀て居て實際はピンと來ない。國策に添ふ必見のお芝居とは、ちとあきれる。其の筋がよう黙認してござる。

近年しばしば、上場される假名手本忠臣藏を何時見ても、筋骨がブツ／＼になつてゐる。即ち、顔世が師直に送つた歌によつて、判官に災ひが降りかかつた事を、顔世は知らぬ振りで濟まして仕舞つて居る。それから、おかる勘平がどうしてあんな駈落するに到つたのか、サツパリ解らない。この原因が解らないから、いくら勘平役者が六段目で氣張つても、觀客にはサ程に勘平の末路が適當に感じられない。

定九郎がイキナリ稲村から與一兵衛を突いて出て、間もなく鐵砲に打たれて仕舞ふので、六段目の二人侍のセリフをウツカリ聞き逃したら、それこそ何の事か、全然解らなくなる。

等々掲げれば限りない。之等は先刻お客様御承知の事として演じられるのであらうが、御承知でない客が現今は十人中八人ある。だから、國民精神云々の建て前から必見の劇といふ看板に呼ばれて行くものゝ、芝居とはこんなものだ、解つた様で解らないものだといふ風に悟つた？お客様によつて興行者は儲けさして貰つてゐなされる。今更、明治時代の型を徒らに尊重しても居られぬ。

といつて、今度の「小笠原」の通し改訂は、ヤハリ明治時代の頭でなされた改作らしい。小笠原騒動の原作といふものを、大體知つて居られるお客様が多いなら兎も角、でない者があれを見て居ては、諺藏といふ作者の陳腐さが感じられる丈で、通しの價値は無い。有名な水車場の筋が消えて仕舞つてゐるので、結局は、序幕歌舞伎らしきと同じく花道を活用したお早殺しの場と良助住家の場だけを演つて、最後の小笠原邸を華やかにクツ付けて置

く、全七場位に省約した方が良い。あの小平次が直訴の件り等は、廻り舞臺の妙味を發揮せねば、暗轉、亦暗轉の幕間の長さ嫌になる。良助と遠江守と二役を同一俳優が演る方があの場合の脚本も生きるのじやないか。

とまれ、あの通し狂言の興味、即ち大筋骨は大神刑部の好悪ぶりであるので、之を度外にしては、小笠原騒動の通しの價値は無い。否、通しとは申されません。隼人役者が幾程氣張つても、大神の大悪ぶりが判らぬので、觀客には一向それ程に興味を湧かない。「天下茶屋聚」が今日、東寺から天神森返り討の二場になつて仕舞つたのも、大序の早瀬玄蕃、對東間三郎右衛門の好悪ぶりを食つて仕舞つて筋骨を省略してゐるから、通しが通しにならずに藝の型のみを觀るに過ぎない中幕物になつて仕舞ふのである。

下手に改作して、通しの生命である筋骨を省略した通し上演は、氣短い現代人をして、益々歌舞伎を嫌悪せしめ

るやうなものであるから、通しと稱する限りは、本當に長篇の全部に股がる筋骨を失はない演出をお願い致します。之は仲々今の興行法の上から六ヶしい事だから、通し上演といふ事は餘程慎重に、重大に扱はれねばなりません。忠臣藏の通しもこの意味に於て、演出改訂を要望します。

劇通家の間で、あの件内に色氣が必要だと言はれて居ても、一般觀客には解せない話なのは、おかるに惚れてゐるチャリ場が省略されてゐる爲です。あのチャリ場と進物場は、全篇の楔(くわ)なのです。あのチャリ場があれば、裏門なしに道行の景事に飛んでも筋は通ります。二段目の松切りよりも、件内のチャリ場は重要です。

だから件内といふ役は仲々六ヶしい役です。演出改訂は斯うして、役の輕重を替へて來るからしても、六ヶしい問題です。

鷹治郎の栗山大膳劇が、其昔の黒田騒動を改作して相當立派に見られたの

は、本筋の首尾を保持して、大膳の政策的手腕の一端を盛込む改作者の創意を加筆された點にある。此の種のもつと立派な改作を在來の忠臣藏なり千本櫻なりに試みて、現代觀客に歌舞伎を除外に呑み込まずと同時に歌舞伎をその本質に従つて、進化させ國民精神運動にも貢獻するに到るのが急務ではありますまいか。

「小笠原騒動」に於ける犬神刑部は、先代萩の仁木彈正に優るとも劣らぬ悪役である。悪役はそれ相當に悪を利かさねば、勸善懲惡が生きて來ない。この狂言を上場する限りには、必ずこの刑部を色々に息吹を加へて大者にせねばならぬのを今回は全然平凡な敵役に終らした事は残念でした。せめて扮装だけでも、エン手のかづらで居る彈正式なものが見度かつた。大詰の小笠原邸内に狐忠信もどきで隼人が現はれるのも、今の觀客には筋が通らぬ。牢屋の場面の方が、お家物らしくて良い。良質な通し狂言といふものは、今の時

勢ではトテモ六ヶしいのですから、忠臣藏でも、時には一番目ものとして、大序から四段目迄を演り、或時は中幕物として、四段目だけを花獻上から可重に一幕物に獨立上演してもよし、或は亦、五六七段目を獨立上演して古典藝術を確實に踏襲保存に盡すのも一ツの方法でせう。無暗に通しにして仕舞ふより、時々斯うした方法で、その程度配役ぶりが變つてもよい。何回にも分けて連續上演の方が、歌舞伎の爲にも良いのじやありませんか。小笠原騒動でも、改訂補筆するなら、奈河晴助作の古脚本の良い部分を取り入れて、良助と小平次の件りと、犬神刑部を主とした件りとを、二回に分けて、隼人をその連絡人物に利用したら相當立派な通し狂言らしいものになりませう。斯うした事は、俳優諸彦もよく考へて頂いて、自分が演り難いから、どうしやうといふやうな仕勝手注文を遠慮して、歌舞伎そのものの爲に盡して頂き度い。

やれ！成駒家！！



人情クラブ

穂村正治

- A おい、忙しさに、何處行きや？
B お墓詣りに行くんですワ。
A 今日は、誰方の御命日や。
B 芝居好きが二月一日を忘れたら如何もならんナ。
A 思ひ出せん。誰れや。
B 成駒家の命日ですワ。
A ほんに、鷹治郎の死んだのは二月一日やつたな。
B よう憶へとけ。
A 偉らさうに言ふな。けど、自分の親の命日を忘れる君がよう氣がついたな。
B 氣が附く筈ですワ。
A 何んぞ譯があるのか？
B 成駒家の本名が林でせう!?!
A そや、林玉太郎や。
- B 林には、木(氣)がつくのは當り前でせう。
A 何や、洒落を言ふてるのか。けど惜しい役者を亡くしたな。
B 日本一やつたね。
A あれだけ大きな役者は、一寸ないね。
B 双葉山でも、鷹治郎の膝までしかなかつたでせう。
A 嘘つけ。双葉山と言へば、お相撲やないか。問題にならんかいな。
B いゝえ、双葉山の生れた時ですワ。
A あゝさうか。それを先きに云へ。
B ハッア〜。
A 笑ふな。けど、鷹治郎が大きい役者やと言ふても、お相撲さんと比較するのは可笑しいやないか。
B 一寸とも不思議がることがあるもんですか。

A 如何してや。

B どつちも人氣商賣でせう。

A あゝさうか。人氣と言へば、鷹治郎の人氣は大したもののやつたね。

B 一年と擴がつて行くばかりでしたな。

A 日本中で知らん者はなかつたやらうな。

B あれで、もう四五年もすれば、世界の成駒家になつてたんですワ。

A 君は、直ぐ調子に乗るで話が仕難いよ。

B いゝえ。僕が調べた處に據ると、鷹治郎の生れた家が、名を廣まるやうに出來上つてましたよ。

A 新町の「扇屋」と言ふお茶屋と言ふやないか。

B さうです。「扇屋」の坊ぼんだけに、末で廣がるでせう!?

A えゝ加減にしとけ。で、或る劇評の本を讀んだんですが、東京、大阪、京都、名古屋と様に、四つの處で同じ狂言をぶつづけて演つて大入になるのは鷹治郎一人と書いてありましたよ。

B そこが、名優たる所以やないか。

A いくら名優でも、さうは續くもんやないぜ。

B けど、本當の名優なればこそ、芝居の仕處しじょ(四處)をちやんと掴んでたんですワ。

A アホなこと。處で、彼の丈の舞臺を觀ましたか?

B 僕は、十年間と言ふものは、鷹治郎の舞臺は、一度も見逃したことはないんですワ。

A えらい熱心やね。如何です、あの「紙治」の舞臺は?

B 折紙つきやからな。

A へ魂抜けて、とぼくと、淨瑠璃じゆりにのつての花道の出は、人間技まじとは思へんね。

B あれが七十過ぎた老人とは、如何しても見えんですからな。

A 全く、油壺から出たやうな、とろりとした姿やつたね。

B ハア、殊に僕の觀た日は、その油がぽとぽとと流れたのには驚いたね。

A それは、君、汗やないか。

B 汗ですか?これが本當のアブラ汗ですワ。

A 妙な洒落を言ふなよ。で、艶物には滴るやうな色氣がある一面に、武張つた立役を演つても、獨特の味があつたね。

B 「盛綱」「寺子屋」「石切梶原」と、その方の當り狂言が澤山たありましたネ。

A 兎も角「假名手本忠臣藏」の狂言を出して、由良之助勘平、師直、定九郎、平右衛門、力彌、何の役でも演れぬ役は無かつたのやからな。

B 猪は？

A 何に？

B いゝえ、山崎街道の猪ですよ。

A 猪位は誰れでも出来るやないか。

B 猪にもなれるのに、成駒家とは、これ如何に？

A 掛合をしてるのやないぜ。君のやうな頼りないことを言ふて、それでも、成駒家黨か？

B 本人が言つてたからには間違ひはありませんワ。

A では訊ねるが、鷹治郎の一番えゝ處は何處やつた？

B 目ですワ。

A その通り。あの眼一つで、何千と言ふお客を捕へたんやからな。

B どつちの方の眼です？

A 難儀やな。あの眼を自在に使ふて観客を自分のものにするのやないか。

B それで、眼、占領（千兩）と言ふんですな。

A 洒落ばかり言ふんやな。併しあの丈も聲の皺喰れるのには、頭を痛めてゐたと言ひますな。

B そんなことは、心配せんでもよかつたのに。

A けど、俳優は、聲が大切やないか。

B いゝえ。聲（戀）は思案の外ですワ。

A もう君と話すの厭になつて來たワ。

B では、世間で餘り知られてゐない隠れた美談をしませうか？

A どんな話や？

B 成駒家と言ふ人は、絶えず、自分の舞臺を弟子に見せて勉強するやうにと教へたさうですな。

A つまり、自分の舞臺を手本にさせたのですか？

B はア、それを口では言はずに、誰が見ても判るやうに、自分の紋で見せた處が、あの丈の奥床しい處ですな。

A 成駒家の紋は、イ菱やつたね。

B イ菱（A B C）は日本語のいろはでせう。だから、手本にするのが當り前でせう！

A よう言はんワ。併し、成駒家が病氣で入院と聞いた時には吃驚したぜ。

B 病氣の原因は、腹に質の悪い腫れ物が出来たんでせう！

A だから、腫物の神様の石切さんへは、随分、ヒイキの人がお詣りに行かれたさうですな。

B 處が、石切さんが、成駒家を商賣敵やと思ふて、御

利益を授けなんだんですワ。

A ほんまかいな。

B と言ふのは、鷹治郎の當り狂言に「梶原」があつたでせ

う。

A 俗に「石切梶原」と言ふ芝居でせう!?

B あの芝居で、石切りの技(業)が、神に入つてゐるからですワ。

A ようそんな無茶なことを言ふたな。けど、君も成駒家のことに掛けては相當詳しいもんやな。

B これは、君だけに話すのやが、僕の兄貴がね、成駒家の家へ絶へず出這入りしてゐるんや。

A それは、一寸も知らなんだよ。一體、どんな関係やね。成駒家の屋號を貰らうて稼いでるだけの話や。

A ほオ、では、君ン處の兄さんも成駒家の一門では、相當古いのか。

B ざつと二十年なるやらうな。

A 相當古顔やないか。

B いや、えゝ加減なもんや。

A で、此の頃は、何處へ出演ではるんや。

B 何處つて、其方此方を流してますワ。

A 一寸待て、流して歩く俳優で聞いたことないぜ。

B 誰が家の兄貴を役者と言ひました?

A 役者でなかつたら、何の成駒家やね

B 夜啼きうどんの成駒家ですワ。

A 何や。それで、君までが、人に一杯に喰はしたのやな。

拍子木の耳を貫くおもしろさ
幕引の袴にさして禮儀なし
長袴足を喰らへの歩きやう
振袖の胸打ちを喰ふ濡事師

繁華街に近く、交通至便

閑雅な和洋室!

●モダン階上浴室新設●

南地ホニテ

南地戎橋電停前

電話南四一四・四四一

一宿一
二圓 半
三圓 息
額半

編輯後記

早春!

寒さと戦つてゐてももう
間近かに希望の春が來てゐ
ると思へば、そゝろに心も
華やく。劇壇にも早く春の
光が流れよかしである。

× × ×

本號の高谷、伊臣兩氏の
玉稿は既に昨年頂戴してゐ
たので、丁度成駒屋の追慕
號を出すのを好機として、
爰に掲載するの榮を得た。

伊臣氏は「觀劇五十年史」
の著者、古くからの劇研究
家である。

× × ×

高安博士、富田泰彦兩氏
からも御多忙の處を成駒屋
追慕にふさはしい玉稿を頂
戴した。略儀ながら爰に厚
く御禮を申述べておく。

延若の權太を御執筆下さ
れた篠山吟葉氏は大阪松竹
の宣傳部長、やはり御繁忙

の處を御執筆願へたのは、
寔に感謝に堪へない。

坂本猿冠者氏は最近文藝
座技藝員として立たれたが
氏の濛い枯れた藝は一寸追
從者はあるまい。

「紙上漫才」を屈けて下
された樺村正治氏は人情ク
ラブの一員、ピチピチした
若手作家、「通し狂言の演
出」に就いて忌憚なき意見
を述べられたZ丁生は物凄
い程の好劇家。

▽愛讀者諸氏へ△

郵便物一切は松竹大阪支
店内宛では輻輳しますから、左記編輯部宛に御送り
願ひます。

大阪市南區大寶寺町
仲之町六一

鳥江鎮也方

道頓堀編輯部

編 森 ほのほ
輯 鳥江鎮也

シリウタオネに核結

…科病柳花…

院医原藤

★番 六三六二六 戎話電 入西健ノ溝筋橋戎★

シリウタオネに核結

<p>発行所 道頓堀編輯部</p> <p>大阪府南區久左衛門町入香地 松竹株式會社大阪支店內</p>	<p>印刷所 商業グラフィヤ印刷所</p> <p>大阪府東淀川區豊崎西通三</p>	<p>編輯人 鳥江鎮也</p> <p>大阪府南區久左衛門町入香地 松竹株式會社大阪支店內</p>	<p>昭和十四年二月十日印刷納本 昭和十四年二月十五日發行</p>	<p>▼廣告の御用は「電通」又は當 編輯部へ御申込の事</p>	<p>▼廣告取扱 大阪電報通信社 北區中之島二丁目</p>	<p>定價 一部 金貳拾五錢 (送料 壹錢)</p>	<p>半年 六冊 金壹圓貳拾錢 一年 十二冊 金貳圓四拾錢 (送料共)</p>
--	---	--	---------------------------------------	-------------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------	---

中村鴈治郎追慕興行
東西合同大歌舞伎



門閨左彌の藏市



いねおの玉梅



節法穿喜の郎十宗



里おの助之鏡



信忠の助之藏



盛月の軍魁



町お娘の子方



前御願の雀扇



經義の郎三長



太懂のみがいの若延

顔ぶれも狂言も配役も満点だ！時
局下に相應しい芝居だと二月京阪
神の人氣獨占！是非お揃ひで！

毎日午後一時開幕

第一 通し狂言 思なる哉 義經千本櫻
下野山道行の
市釣瓶すしやの
同連法眼の銀の
場場場場

第二 徳月佛會 我
食前南北作並ニ衣裳考案 一五時廿五分
榎友都陸平振附 松田種次装置 大藏の花清元梅吉社中
購立瀧の月杵屋佐吉社中
富嶽の雲文樂座 三味線出演

第三 天晴れ日本武士道の稱 十八番の内勧進帳
一六時四十分
長子連
榎屋佐吉社中出演

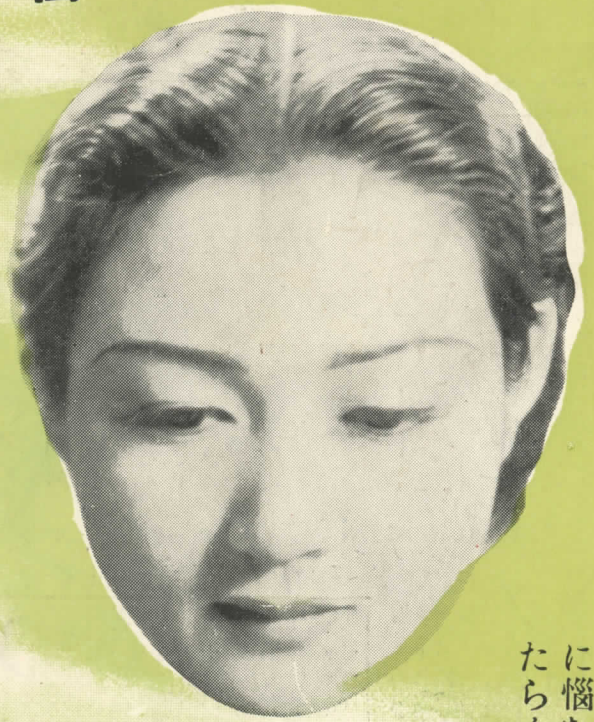
第四 郷田直作・大塚冠三装置 繪船場歌しぐれ全三場
一八時十五分

第五 文屋と喜撰 清元梅吉社中出演
一九時十五分

◆御劇料◆
 櫻席 一・七〇〇
 第一席 一・五〇〇
 第二席 一・三〇〇
 第三席 一・一〇〇
 第四席 九〇〇
 第五席 七〇〇
 (他に場税二割)
 ◆別賣切符◆
 一等席は五日前より・二等席より櫻席までは前日より一巻券は毎開幕前に發賣致します
 ◆団体御劇◆
 団体御劇は是非當座と御決下ささい、時に御相談申上げます
 電話(二)二八二六

暖房完備 大阪大歌舞伎座

松竹大船
文藝超特作



見合結婚後に戀愛を得て家庭への責任と大きな愛に悩む若き夫の姿を描き家庭中心主義への指導篇たらんこす……

桑野通子・木暮實千代
佐分利信・井秀男

一浦光子・花房廣子・岩田祐吉
大山健一・水島亮太郎・岡村文子
伊東光一・上野史郎・出雲八重子
汀陽子・關かほる・松尾千鶴子
菊池寛氏原作 (主婦之友連載)
蛭川伊勢吉監督 脚本 八本澤武孝
撮影 武富善男

新日天
女天
氣
回

近切封

定價 金二十五錢

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十四年二月十日印刷(毎月一回)
昭和十四年二月十五日發行(十五日發行)
「道頓堀」第四百七十七號 第十四年